

山内久氏と玲子さん。1991年、蓼科・城の手（小津・野田有緑碑）の前で。

# 山内久／玲子聞き書き

（聞き手）

渡辺千明

藤久ミネ

## 第一回 野田家の人びと（1）

### 『晩春』のころ

——戦後の野田さんと小津さんのお仕事をずっと通して拝見していきますと……。

玲子 同んなじようなのの繰返しでしょ？（笑）。

—— いえいえ……（笑）。その中でも特に『晩春』と『麦秋』『東京物語』というのは本当に屹立しているなど今回改めて思ったんですが。

玲子 あとは、だって無理にひねり出したみたいな（笑）。

——（笑）……そんなことはないでしょうけど、その意味で戦後最初の『晩春』はいろんな点から重要な映画だと思っんですが、やはり『晩春』も清書されてたんですね？

玲子 そうです。それから、そのころ父はほかの人との仕事もしてましたからね。そういうのみんな。

——『晩春』を書かれてたころは茅ヶ崎館ですね？

玲子 『晩春』のときは中西だったかしら。

久 いや茅ヶ崎館だろう。

玲子 茅ヶ崎館かな。あたし、なんか中西に行つて清書した覚えがあるんだけどな。なにかは忘れちゃったんだけど。

久 中西はあとだよ。会社（松竹）だつて、ずいぶん現金で、成績がいいならいいけど、そうじゃないと茅ヶ崎館で済ませるつてことがあるからね。

玲子 そうね……。茅ヶ崎館でね、こつち側海だとするとコの字型になつてんですよ。で、こつち側（東側）とこつち側（西側）に古い部屋があるの。（真ん中を指し）で、ここは、あのう……。

久 連れ込みだよ。

玲子 建て替えたりして継ぎはぎだらけの家でしたからね。海に向かつてこつち側（東側）のこの一角を占領してたわけ、二人が。

——野田さんと小津さんが。

玲子 そう、それから斎藤良輔さんね。

久 斎藤さんも長かったなあ、あそこは。

——じゃ、野田さんと小津さんの下書きが出来上がると呼ばれるわけですね？

玲子 ええ。その間にも、なに持つてこいとかな、なにが食べたいとか、着替え持つて来いとかで行つたりはしましたけどね、終わり近くなると、そろそろ来て始めのほう清書しろつて言われるもんですから。あたしはコの字型のこつち側で……これがボロ家だねえ、タダつて広くてね。

久 みんな恐がつて、小津さんなんか、あそこ二階に部屋取りましたつていうと、あー、いやみんなの側がいいなんて降りてきたらしいじゃない（笑）。

玲子 でも、あたしは、こつち側に一人で寝てたの。だつて、こつち側は安眠できないでしょ？ ベつに二人が寝言言うわけじゃないけどさ（笑）。そこに二、三日泊まつて清書しました。

——野田さんは、お弟子さんはそのころいらつしやらないんですか？

玲子 あの人は、お弟子さんてのはずつといませんでした。最初っから。

——じゃ娘さんに仕事を引き継ごうというような気持ちがあつて清書を。

玲子 いえいえ。父は原稿用紙を裏つ返しにして書くんですよ。罫があると書きにくかつたらしいのね、マスに入れていくのが。そうするとだいたい一枚が三枚半から四枚分になるわけ。そういう形で書いてつて、あたしが清書して、これで何枚分になつたつていうことになるわけだけど、そんな面倒くさいこと娘しかやらないでしょ？

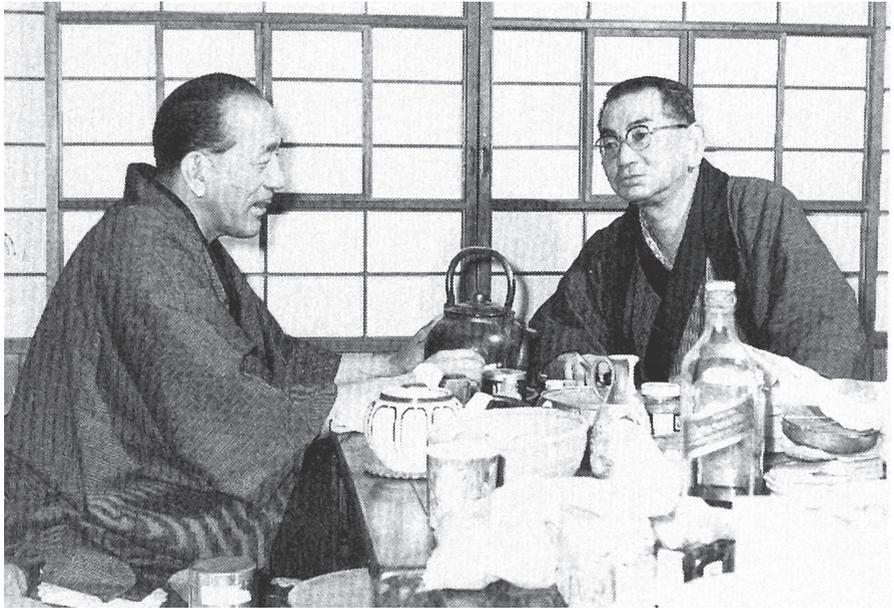
## 野田・小津の共同作業

——野田さんと小津さんの共同脚本のやり方というのは、野田さんが先に一種のコンテというのか、そういうのをお立てになるのか、まあ作品によつていろいろでしょうけど、それとも小津さんのほうからこういうものをと出てくるのか、どっちが主導だったんですか？

玲子 やつぱり父でしょうね、だいたい。おしまいのほうは変わりましたけど、初めのころは、こう、話しながらやりたいことを書き出すんですよ。例えば娘と父がなをした、かにをしたつてことを、ストーリーの展開とは関係なく。バラバラにこういう話を入れたい、ああいう話を入れたい。

——例えば『晩春』で言いますと、京都の宿に笠（智衆）さんと原節子が泊まるというように、まずやりましょうと。

玲子 そうそう。京都に泊まつて、あそこで、あれをメインに考えて、



「東京物語」の頃、茅ヶ崎館にて小津安二郎監督(左)と野田高梧氏。

それにこう尾ひれをつけていくっていう。

——それはカードみたいなものに書き出されるわけですか？

玲子 初めはそうだったんです。これくらいのカードをつくって。

久 それを並べて、この芝居はもつと前になきや効かないよみたいなことを話しながら形をつくっていくという、これは我々も勉強になりましたけどね。

玲子 原稿用紙をこれくらいに切って。六つ割り……四つ割りかな。

——それを並べ変えたりしながらストーリーがだんだん立ち上がってくる。

玲子 大ざっぱなシチュエーションはもちろん先にあるの。例えば、親子の話でやりましようっていうことなら、どういうシチュエーションにしましようくらいまではあって、それを組み立てていくのに、カードで、このためにはこういう話が必要、そのためにはこれは要らないとかやっていくの。

——清書が上がると、感想聞かれたりするようなことはないんですか？

玲子 ありますよ。どうだって。面白くありませんとは言えないし(笑)。

——特に『晩春』とかは若い女性の話ですからね。それを、清書される玲子さんに感想聞かないはずはないですよ。いまの若い子がちゃんと書けるかとか。

玲子 うん、そういうのは気にしましたね。だから、いまの子はこんなに甘くないよとか(笑)、ずいぶん意地の悪いこと言いましたけどね。

久 なんだっけ、小津さんがおれはこういうところで泣かない娘は嫌いだって怒ったの。なんのときだっけ。

玲子 そうそう。お父さんが結婚を許してくれたっていうんで娘が泣くの……有馬稲子が。

——『東京暮色』ですね。

久 親父が結婚許してくれて喜んで泣いたっていうのが、(玲子を

指し)これがそんなの泣きやしないわよついたら、小津さんが怒って、こういうときに泣かない娘はおれは嫌いだ!つて(笑)。

玲子 嫌いだとか好きだとか関係ないじゃない。あたしはわりに突っかかるほうですからね。小津さんとは、なんていうか半分ケンカ友だちみたいだったから。

## 戦後「小津映画」の始まり

——小津さんの作品の流れで言いますと戦後最初の映画が『風の中の雌鷄』で、これだけがシナリオが野田さんじゃなくて斉藤良輔さんなんです。出征して帰ってこない夫を待っている母親が、子供の病気で困って一度だけ売春するという話で、戦争問題をほんとにストレートにやられてるわけですが、その次が『晩春』なんですね。

玲子 うん。

——野田さんは『雌鷄』は良くないとおっしゃったということなんです。が、やっぱりお父上はそう思っておられたんですか?

玲子 おれは嫌いだつて言ってみました。あれは嫌いだつて。

——それで『晩春』という、こんどは「父と娘」というガラリと違う世界に転換されていって戦後小津映画の輝かしい山脈が始まるんですけど、それはどういう機縁だったんですか?

玲子 『晩春』の最初のきっかけはね、誰だっけ、あの原作書いた人。

久 『父と娘』を書いた……。

久 広津和郎。

玲子 ああ、広津和郎。熱海に志賀(直哉)さんの別荘があつて小津さんが遊びに行ったのね。そしたらそこに広津さんが見えて、お帰りになった後、志賀さんが広津さんのをなんかやってくれないかっておっしゃったの。なんかそのころ広津さん、とっても経済的につらいときだったらしくて、出来たらなんかやつてもらいたいわつて。小津さ

ん、ほら志賀さん一辺倒だしさ。それで、じゃあなんかやりましようつていうんで、いろいろ探して、一番あれが……なんて言ったらあたしの言い方になっちゃうけど、父が広津さんのものを読んで、この『父と娘』が一番いいかなつて。おれに出来るものつていうことであの人選ぶからね。それでこれなら出来るつていうんで。

——では小津さんが主導したわけでもなさそうですね、『晩春』については。

玲子 中身はね。だけど、きっかけは、やっぱり小津さんが志賀さんに頼まれてということ。

——『晩春』は観客動員という点からも成功したわけですが、その一種のバリエーションがずっと以後……。

玲子 うんうん。

——『晩春』は、出来たときはどこでござらんになったか覚えておられますか?

玲子 たぶん大船(の撮影所)で見たと思ってます、試写会で。父にくつついてたつて感じて。

——ござらんになってどういう感想をもたれたか覚えておられますか?

玲子 うーん。小津さんは必ず、終わると、どうだつてお聞きになるのね。だから、あたしは一応面白かつたつていうよりしょうがないから、そう言うんですけど(笑)。わりに気持ち良かったつていう感じはしました。気持ち良かった。

## 「浄明寺青年連盟」

——『晩春』以後の『麦秋』『東京物語』は、これは原節子が紀子という役を演じて「紀子三部作」とも呼ばれるわけですが、特に『晩春』の紀子つていうのは、戦争中海軍に勤めてたとか

〔晩春〕 シーン11)

周吉「なんだい東京……?」

紀子「病院……(略)」

(同、シーン26)

周吉「お前、どうだったい、血沈——?」

紀子「十五に下がったわ」

周吉「そうかい、そりゃよかった」

とか、玲子さんの身の上から明らかにヒントを得ておられるという感じのところがあるんですが、そういうことはよくあつたんですか? 自分をちよつと使つてるなあというような。

玲子 それはね、蛮さん(監督・井上和男氏)の奥さんのカツコチャんっているでしょ?」

——ええ、井上和子さん。

玲子 あの人たちとか、若い人が、うちの鎌倉の家にしょっちゅう遊びに来てたんですよ。カツコなんかは蛮さんと結婚する前からね。

——若い人のグループで「横須賀線の会」とか、これは名前もすごいんですが「浄明寺青年連盟」というのがあつたそうですね。

玲子 青年連盟つてのは、戦争が終わつて、若い人たちがみんな何していいかわかんなくて困つてんですよ。それで父が、みんなブラブラしてんじやいけないから、若い人たちを集めて芝居をしようつてことがあつたの。割にみんな芝居が好きなんですよ。だけど台本がないつていうんで、父がチヨコチヨコつて書いて、書きたい人もいて。

——それをお寺で上演するんですね?

玲子 そうそう。浄明寺つていうお寺は境内が広いんですよ。それと、うちのお父つあんオッチョコチヨイだからさ、みんな仲良くならうつていうんで運動会やったの(笑)。これは別の場所ですけどね。で、

山内久／一九二五年、活動弁士山野一郎の次男として東京に生まれる。四九年松竹大船シナリオ研究所入所、翌五十年松竹大船脚本部入社。五九年松竹退社。以後フリー。主な映画作品に『幕末太陽傳』『豚と軍艦』『私が棄てた女』『聖職の碑』ほか。テレビ作品に『若者たち』『破獄』『雪』など。

山内玲子(筆名・立原りゆう)／一九三三年生。シナリオライター野田高梧の長女として東京に生まれる。主な映画作品に『わが青春のとき』『ガラスのうさぎ』『キムの十字架』ほか。テレビ作品に『若者たち』『みつめいたり』『春風馬堤曲』など。

聞き手

渡辺千明／シナリオライター。日本映画学校専任講師。主な映画作品に『十八歳、海へ』『かまち』『ジャイブ——海風に吹かれて。』テレビ作品に『あいつと私』『ドキュメンタリードラマ昭和・連合赤軍の崩壊』など。

藤久ミネ／放送評論家。主な著書に『おんなの原風景』ことばの抽きだし。訳書に『オンリー・イェスタデイ』『シンス・イェスタデイ』など。

そこにまたお父つあん以外のオッチョコチヨイがいつぱいいて、それがきっかけでとつても仲良くなつちやつたのね。

——じゃ純然たる仲良しグループで。

玲子 仲良しグループ。芝居をしたり、ハイキングに行つたり、近くに川が流れてるんだけど、そこに溜まるゴミ掃除したり、いいこともするし(笑)。若いほうとしては大人に呼び掛けると、いくらかずつかンパしてくるでしょ? それが大事なことだったわけね。

——野田さんが若い人を集めてワイワイされるのが……。

玲子 好きだったの。

久 おそらく時代とのギャップを感じて、自分の仕事とのつながりの上で考えたに違いないですけどね。

—— ああ、なるほど。

玲子 春とか秋とかにピクニックに行ったり、それがだんだん恒例になっちゃって、浄明寺の一角以外からも、おれも行っていいか、わたしも行っていいかって若い人が来て。で、小津さんはそういう知り合いがないでしょ？ それでハイキングのとき小津さんも連れ出すのね。

—— 『早春』にもハイキングが出てきますね。

玲子 そうそう。彼らと知り合ってから、小津さんも「いまの若者」について考えるようになったっていうのかな。だんだんそれが楽しくなっちゃって、今度いつだ今度いつだと言って言うようになって。そういうことが小津さんも映画人じゃない子と付き合うきっかけになって、そこからの作品のヒントはいろいろあったみたい。だから、あたしはっかりじゃなくて、いろんなモデルがいたっていうのかな。

—— 『早春』で、池部良と岸恵子の仲がいろいろこじれますね。

玲子 あれは、そのままモデルがいたっていうのかな（笑）。ハイキング行つた帰りに、ご飯食べるでしょ？ 一、三十人になりますけど、父と小津さんが二人で出してくれるんですよ。そのほうがこっちは楽だし、楽しいし。

久 でも横須賀のマグロ屋で、会のやつが小津さんの好きな、シンガポールはなんとかって軍歌——『まだ進撃はこれからだ、遺骨を抱いておれは行く、シンガポールの街の朝』というのを、小津さんが思い入れ込めてやるって聞いてたから、それやってくださってみんなで頼んだら、ものすごくいやな顔をして絶対やらなかったね。

玲子 でも、あそこでやったでしょう。無雲荘でみんなで騒いだとき。久 それは知らないんだ、おれは。……悪い顔して断られて。だか

らいろんな二面的なものがあるんだよな、あの人の戦争体験は。

## 小津さんの戦争

—— 小津さんの作品は、通常言われるような「娘の結婚問題」というような単純なホームドラマじゃなくて、底に深く戦争のことが流れてる気がするんですけどね。

久 戦友が出てくるもんな必ず。

—— ええ、必ず戦友が出てきますし、「紀子三部作」も、息子が戦死したとか旦那が戦死したとか、そういうふうな戦争が効いてるんですよ。玲子 うんうん。

—— 『麦秋』なんかは下のほうには随分戦争が流れてますよね。

—— そうですね。僕なんかも、こんどずいぶん久しぶりに見たんですが、最初見たときは気がつきませんでした。あんなに息子の戦死が効いてる映画だったとは。

玲子 でも小津さんは、そんなに戦争……戦争自体はもろろいやでしようけど、戦地に行つたことは懐かしがってらっしゃいましたからね。

—— シンガポールとかですか？

玲子 どこだっけ、……中支ね。佐野周二と会つた話とか、山中（貞雄）さんと会つたこととか、たのしそうに話してたよね。

—— 小津さんの日記を読みますと、戦地の記述がえらく克明なんですわ、戦場の様子とかも含めて。

久 ああそう。

—— よくこれだけ冷静に記録するもんだなあという気がするんですけど、それこそ討伐戦で榴弾が爆発してどうとか、よく覚えてるなど思うぐらいの日記なんですけど、それが戦後全くそういうことを引つ張らないですよ。

玲子 そう。あたしも直接に、小津さんから戦争の話聞いたことないからね。

久 ないだろ？ あれだけ密着してたあんたが聞いてないんだから、ほかの人にもしてないよ。

玲子 あの人、ほら毒ガス隊だったでしょ？

——ええ。

玲子 だから、いやだったんだらうと思いますけどね。シンガポールに映画班みたいなことで行ったでしょ？ あの話はよくなさったけど、戦争自体のことは全然なかった。

——シンガポールでは結局なんにも撮らないで帰っていらしたんですね？

玲子 そうなの。で、あの『シンガポールの朝の街』を歌いながら泣くのよね。ほんとに涙を流して泣いてるの。よっぽど戦友のことを思ってるのか、悔しいのか、それは毎回涙流されるの。

——その歌は『お茶漬の味』で笠（智衆）さんが歌う歌じゃないですか？

玲子 そうそう。

——戦争帰りの笠さんがパチンコ屋の主人になって、鶴田浩二が「オジサン出ないよ」とドンドン叩くもんだから笠さんが上から覗く

と、鶴田浩二の横に戦友だった佐分利信がいて。とにかく部屋に連れて行ってお茶を飲ませるんですが、もう戦争はいやだいやだと言いなから、だんだんに興にのって笠智衆が歌いだすんですね。佐分利信は困ったような顔してるんですが、笠さんはすっぴんがいい気分になっちゃって、戦争はいやだ戦争はいやだと言いなから、その歌を実に気持ちよさそうに歌ってしまふ。

久 愛情込めて歌っちゃうんだよね。

——面白いシーンでした。

玲子 なんか戦友のことを思ったりして、懐かしさと悲しさと両方混ざってるところがうまいの小津さんは。

——その歌を、若い連中がやってくださいと言うと小津さんは厳しく拒否されたということですね？

玲子 うんうん。

——確かに二面性というのか、懐かしさもごもごもあって、『秋刀魚の味』では軍艦マーチが出てきたり。

久 長い！って言いたかったなあ。……長かったなあ、あれ（笑）。

——「帝国海軍は勇ましく南方に進出して……負けました！」（笑）。

——それと横道かもしれないけど、小津日記を見ますと、芸術院にも入られましたから天皇と会うところがあるんですけど、えらい喜び

ようなんですわね(笑)。

玲子 ほんと天皇が好きだったの。

久 昭和天皇だな。

玲子 だから、あたしに言わせれば、あの人に戦争に連れてかれちゃったようなもんなのに、どうしてそんなに懐かしいのかなと思うくらい好きでしたよ。天皇っていうか皇室が。戦地の体験と天皇というのは接続してないの。なんか勲章もらうんで宮中行くでしょ？ そういうとき、ほんとに嬉しがつてた。

——そのころ久さんは小津作品を同時代的にごらんになってたんですか？ 封切時に。

久 『晩春』はずーつと観なかつたなあ。ずっと後になって観た。なんで観たんだったか。

——当時の若者からしますと、小津作品というのはどう映ってたんですか？

久 もう、罵詈雑言(笑)。

玲子 ひどかつたね(笑)。

久 共通の攻撃の的だったね。

——罵詈雑言は、やっぱり、ちよつとハイクラスの家を舞台にしやがつてとか、社会性がないとかいうことですか？

久 そうですねえ。

——通奏低音のように戦争のことは出てくるんだけど、さつと見ると、あんまり気づかないで見てしまうんですね。そこに深慮遠謀があったのかなとは思ってすけど。

久 それへの反発っていうか、なんか不足だ、これはなんか不足しているっていう感じは、あらゆる小津作品に感じましたねえ。いま見るとジンと来るんだけども当時はジンとも来ない。

——いまごらんになるとジンとは来るんですか？

久 来るんですねえ、やっぱり、なんか(笑)。

## 『麦秋』

——『晩春』が野田さんの主導であつたとしますと、次が『宗方姉妹』で、『麦秋』になって、その次に『お茶漬の味』……。その次が『東京物語』で、傑作が一つおきに来るといふと失礼なんですけど(笑)。

玲子 『お茶漬の味』は、小津さんがやりたかつたの。戦争中に台本が許可にならなくて、(戦争に)行っちゃつたでしょ？ あたしは、なんであれにあんなにこだわつたのかわからなかつたけども、やりたかつたのね、あれは。

——戦争中のシナリオは、夫が兵隊に行くつていうことで夫婦が和解するつていう話ですね。

玲子 うん。

——戦後出来た映画は、亭主がウルグアイかどつかに海外出張に行くつていう……。

玲子 どうでもいい話に変えちゃつたね(笑)。

——で、やってみて、やっぱり『晩春』の路線に戻つていくつていう、そういう感じですか？

玲子 うん。そうね。

——『晩春』で観客的にも成功して、それ以後の作品を小津調と呼んでいいのかどうかわからないんですが、ある路線が出来たわけですが。玲子 あたしはね、あれは小津さんというより父のだと思ひますけどね。

——『晩春』は。

玲子 『晩春』も『麦秋』も。ことに『麦秋』はね。『麦秋』は父がやりたかつたものなんですわね。親父さんは、あれは割に思うつて書けたらしいの。おれはこれを書けたからいいよ、これはちよつと人には書けないと思つて言つてましたから。(この項つづく)